

## 〈格闘〉する草森紳一

—増殖する言葉たち、あるいは完成原稿を夢見て—

田 中 厚 一

(帯広大谷短期大学)

### 序

草森紳一の蔵書の世界に触れるのは彼の「脳内を探検することだ」<sup>1)</sup>と語ったのは、漢和辞典編纂者・ライターの円満字二郎氏だった。草森紳一氏が亡くなった後、「草森紳一蔵書整理プロジェクト」と名付けられた有志が彼の膨大な蔵書の整理を行ったのだが、円満字氏はその中でも帯広大谷短期大学との橋渡しをしてくれた人物の重要な一人<sup>2)</sup>である。

蔵書が示しているが如く、草森の仕事はジャンルが多岐に渡る。それだけに彼の仕事の全体像が見えにくいのだ。草森の蔵書群は円満字氏が述べたように迷路のようで、一度入るとなかなか出口が見えにくい。もっとも出口を探し出そうと思うことすら忘れ、彼の思考とともに在る快感を感じることができる。まさに、「脳内探検」の愉楽なのである。

帯広大谷短期大学に彼の3万2千冊にも及ぶ凄まじいまでの蔵書が寄贈されて7年が経過した。その間、地元のボランティアの方々を中心に目録作りが実を結び始めている。(現在、漫画関係を中心に帯広大谷短期大学ホームページに随時アップされ初めている<sup>3)</sup>)。

好奇心の塊である草森紳一の全体像をこの機会に議論することは、現段階では私にとってももちろん荷が重たいのだが、ここ数年、氏の文章と付き合ってきた中で彼の文章作法について気がついたことなど本稿を通じて分析・確認してみたいと思う。そのこ

とは、そのまま彼の表現スタイルの全体像を明らかにしていく、そんな取り組みのささやかな一助になると考えているからである。

### 一

蔵書の落ち着き先がはっきりしたという事実に呼応するかのようには、草森紳一の仕事の整理・確認が少しずつ始まってきている。例えば、『本で床は抜けるのか』(本の雑誌社 2015・3)の中で、著者・西牟田靖氏は次のように語っている。現在帯広大谷短期大学で蔵書を保管している、廃校になった東中音更小学校に出向いた時の印象から。

並べてみると案外、場所を取らない。草森が命を削るようにして抱え込んだ蔵書の持つ迫力が、半減したような気がして拍子抜けしてしまった。

本が崩れてしまい、風呂場から出てこれなくなってしまったというエピソード(『本が崩れる』文春新書 2005・10)や、草森の給料の約7割を費やした(例えば、愛敬浩一氏「白玉楼中の人草森紳一記念館」『季刊詩的現代9』(詩的現代の会 2014・6)には給料の7割を使ったとの話の他に、月150冊買ったなどとの草森の発言が紹介されている)などといった〈伝説〉を有する草森の蔵書が教室3つと多目的スペースひとつにすっぽりと収まってしまった現実には西牟田氏はある意味、やるせなさを感じてしまったのかもしれない。また、さらに北海道帯広市郊外・音更町の実家にある山下和正氏設計の書庫「任臬蘆」(にんきょうろ)に出向いた際、

平成28年11月10日受理

連絡先 〒080-0335 北海道河東郡音更町希望が丘3-3

帯広大谷短期大学 学長

TEL 0155(42)4444 FAX 0155(42)4499

Email tanaka@oojc.ac.jp

圧倒的な高さを持つ本棚に四方を囲まれている。これらの本の持つ存在感はすさまじい。書き手をせきたてて書く気にさせる、という意味では終の住処となったマンションの部屋と同じ特徴を持っていると言っていい。

〈中略〉自分自身と対峙できる深い穴倉のような空間ではないか。

と、印象を語っている。つまり氏は傍線部に示されているように蔵書の置かれ方、あるいは距離の取り方自体が草森の仕事を全面的に支えていたのではないかと論じているのである。山下和正氏が「胎内へ回帰するような「内臓空間」を表現」してほしいと草森自身から要請されたことを西牟田氏は先の書で語っている<sup>4)</sup>。おそらく、草森自身は場（トポス）の問題として蔵書と共にあることの意義を体感したのであろう。蔵書と共にあること、書物の存在感が草森の仕事に大きな影響を与え続けていたこと。これからの草森紳一研究の議論の中枢にこの〈場〉の問題はかなり大きな問いかけとして浮上してくると考えている。

西牟田氏以外でも草森紳一の蔵書に関して関心を持った人物がいた。山藤章一郎氏である。彼は、かつて週刊ポストに「現場の磁力」という連載を持っていたライターである。2012年4月13日号の「ポスト」誌に「本に埋もれて死んだ二人の男」と称して文章を載せている。草森紳一の他に、小津安二郎研究で有名だった田中眞澄氏の蔵書に関するエピソードと重ね合わせて文章を紡ぎ、草森紳一を「本格闘家」と呼ぶ。パソコンを使わずにひたすら手書きをつら抜いた「物書き」。中でも、草森紳一の良きパートナーと言われた東海晴美さんが草森から聞いた言葉は興味深い。

「『おれは本からエネルギーをもらっている』といていましたので、売らずに蔵書先を搜して搜して。帯広大谷短大にお世話になっています。〈後略〉」

先に傍線を引いた西牟田氏の言と、東海氏のこの証言は重なり合うところがあるように思う。草森のこの発言は、まさに本を愛し、本と格闘し、そして

本とともに亡くなった男の生き様を示しているように思えるのだ。山藤氏は、次のように語る。

3万冊を越す高嶺である。このすべてが2DKの中に聳<sup>そび</sup>えている。

あとで、整理のボランティアが数えた。段ボール731箱。3万1618冊。毎日1冊読んで87年8か月かかる峻嶒<sup>しゅんけん</sup>の山である。

ほかにまだ。北海道の郷里に3万冊。合わせれば、175年分。

つまりは一般常識では考えられない冊数であるということだ。本を読むだけでなく、触り、慈しむ。そこから、彼は書くエネルギーを得ていた、ということだろうか。読むことから書くことへ。草森紳一の「物書き」人生にはそんな創作者の本質的な課題も見え隠れしているのだ。

こんな風に「草森紳一」論には、新しい風が今まさに吹き始めてきたといえようか。

## 二

生前の草森紳一の姿を映した番組が手元にある。1998年に制作された『誰も知らなかった手塚治虫』（時空工房 手塚プロダクション 前後編2巻組）である。手塚治虫の死去（1989.2.9没）に際し、その全体像の評価としての意味合いも強かったのかと思う。司会は児玉清氏、草森の他に、手塚に師事した経験のある劇画「コブラ」などで印象的な仕事をした寺沢武一氏も出演している。手塚に対し、批判的だった草森はここで〈「手塚治虫」論を書いていたらとてつもなく長くなってしまった。当初の30枚の予定が180枚もの長さになってしまい、まだ終わらずに仕方がなく諦めた〉と笑う。この論文は、1996年2月号の「広告批評」（マドラ出版）に掲載された「手塚治虫の「太平策」」を指している。（実際、この雑誌を片手に持ちながら、草森は司会者児玉清氏との対話を行なっているのだ）。この番組で、例えば草森は〈「火の鳥」について〈輪廻の構造〉の枠のうちにあり、外へ突き抜けていく何かを手塚は考えていたはず〉といった旨の発言をしている。また、そんな中で『奇子』（小学館『ビッグコミック』

1972年1月25日～1973年6月25日連載）を手塚の最高傑作と評価し、そこに手塚治虫という作家の可能性を見ている。『奇子』はそれまで時代のなかで書かされてきた手塚が受動的だった自らを振り返り、改めて世界史的な視点で世界、そしてそこに存在してきた自己を見つめ直すといった仕事となっているのでは、と主張されている。（この作品は手塚に圧倒的な影響を受けていると自認する漫画家浦沢直樹の『ビリーバット』（『モーニング』講談社 2008年46号～2016年38号）が関係性を有していると考えている。オマージュを捧げているのではと考えているのだが、この点については稿を改めたい）。また、草森は、〈手塚の作品はどれをとっても骨格がしっかりしており安定した作品となっているが、ただ、絵だけはもっと完成の域まで持っていきたかったのでは〉、とも論じている。実際、草森が手塚治虫をどのように考えていたのか、特に『奇子』の評価に関しては別の機会に譲りたく思う。この論では先に示した手塚治虫に対する評論を具体的に検証しながら、彼の文章の書き方の一端に触れて見たいと思うのだ。

なお、『火の鳥』や『奇子』に関しては、この評論の終わりの部分で詳細に批評している。最初に長い引用になるが『火の鳥』に関して、その一端を紹介しておこう。

未完の大作『火の鳥』にあって、過去は日本の古代から順に上へ「現代」に向かって遡上し、一方、未来は、順に下へ「現代」に向かって下降していくという構成をとっている。「現代」に行きつかぬうち、手塚治虫は死ぬ。

これは、ということなのだろうか。それまで、手塚治虫は、未来もの古代もの時代ものの独立したマンガを書いてきた。たとえば、古代ものを書くことは、未来ものと同じように、一つの夢である。とりあえず、知らない世界だからである。同時代を肯定するものなど、だれもないから、夢になる。古代に対しては、人間は今とちがって素朴だったのではないかと思ひこむ。未来、もとりあえず、知らない世界であるから、今の愚かさも克服し人間はもっと利巧に素晴らしくなっているのではないか、と思ひ

こむことができる。

だが、そう思ひこむことそのものが現在にすぎない。生きている時点で、いくら未来を描こうと過去を描こうとも、そこに生きている人間は、着せかえ人形のようなもので、その本質はひとつも現代と変わっていないようにしか描けない、という限界がつきまとう。つまり、相変わらず人間は愚かであるようにしか描けない。

最終的に手塚治虫が『火の鳥』の終着点で「現在」を描こうということは、いったい、どういうことなのか。かたちの上での円環の輪を閉じるということにすぎないのか。

草森は番組収録での発言と同じような内容をすでにこの評論の中で書いていた。というよりも、既に自分で書いたこの論を参考にしながら持論を展開していた、と言ってもよいように思う。あるいは、この論を実際に現場で読み直しながら持論を展開していたと言ってもよい。円環の輪（番組では輪廻転生を突き破っていく、といった表現をしていたのだが）を乗り越え、新しい展開を手塚はイメージしていたのでは、と草森紳一は想定している（期待している）のである。

さてこの評論では、手塚を論じるに際し、草森自身の幼少期から語り始めている。自分の小学校を卒業した年（1951）に「鉄腕アトム」が誕生したといったことから議論を出発させるのだ。同時代の歴史的な出来事を丁寧にたどりつつ、まさにその時代に「鉄腕アトム」（当時は「アトム大使」）が出現したことの意義について、多くの字数を費やして書いて来るのである。草森は、

手塚治虫は、単行本発刊のたびに手を入れてるので、私が初めて読んだ時の体験に即すなら、雑誌「少年」をもってすべきだが、ここではしない。テキスト・クリティックの必要な少数の漫画家の一人である。すでに手塚の場合、はじまっていると言えるだろう。

と、述べている。漫画にあってもテキストクリティックが必要である、との論は当時としては卓見

であると言えると思う。(ただ、初出の雑誌がこの評論執筆時に手にはいらなかったからだ、とも判断できそうだが)。いずれにせよ草森は1995年10月に刊行された光文社文庫版をひもときながら、この原稿を書き始めている。(実際、彼の蔵書の中にはこの文庫があり、しかも、この評論を書くにあたり、必要な箇所付箋やメモがつけられているのである)。

草森紳一は漫画の一コマ一コマを細かく分析していく。というより、一コマ一コマに地の文(解説文)を付け加えていくような印象がある。例えば、こんな引用はどうだろう。

天馬博士は激怒し、アトムを身長計で叩きつける。身長計は、木であるから、アトムの頭の固さに負けて折れてしまう。折れても、アトムは平気である、というより、傷ついた博士の心を理解するかの如く、悲しげに目を伏せつつ、崩れ落ちていく。

漫画に対する細やかな解説と言えよいだろうか。いずれにせよ、草森紳一は漫画を丁寧にじっくりと、原稿の枚数など全く気にすることなく解説を加えていくのである。もっともそれだけでは彼が番組内で述懐するように大幅に字数が多くなり、枚数が増加するとは現実的に考えにくい。実は草森の〈真骨頂〉は他にあるのだ。書かれた一コマ一コマに対する本人の感想から始まり、それをベースに批評を大きく転回させていくのである。先の引用に続けて、彼はこんな風書いている。

この間、わずかに数コマの描写だが、手塚のマンガセンスは冴えている。父なるものの子に対する横暴のかたちである。理不尽の図の誇張でもある。たいていの子供は、不服そうに、怨めしげに父を見る。また叱られる。愛情の一態だと大人はいうが、子供には到底そう思えず、いじめに見える。ところが、このアトムたるや、あくまでいい子でしおらしいのである。私は大不満であった。

手塚治虫も、いじめられっ子だったようだが、私もそうである。

つまりはアトムの描き方が父の横暴さに比べ、あまりに良い子に描いていることに対しての不満が、この論における草森の手塚批判の根底にあることが理解できるのだ。まして、手塚治虫がかつていじめられっ子だったと同じく草森自身もそうであったことを自ら告白し、だからこそ、手塚にはもっと突っ込んだ主人公の造形を期待していたのである。ここから、いい子に対する理不尽な「いじめ」について、自己の経験を踏まえて筆は急転回し、予定されていたであろう論理的なルートからはみ出していく。この後、草森のテキストはアトムを離れ、400字詰原稿用紙で約8枚弱に渡るくらいの字数を要して、彼の体験的な「いじめ」論が披瀝されていくのである。ちなみに、彼の論が世にでる10年前の1986年2月に「中野・富士見中学いじめ自殺事件」が起きる。中2の男子生徒がいじめられ、結果、自殺をしてしまうという気の毒な事件だった。また、この事件をきっかけに日本各国でいじめの事案がひっきりなしに報告されていく。1994年にも愛知県で同じく中2男子のいじめによる自殺が起り、世の中は〈いじめ問題〉一色となった。学校や教育委員会の不誠実な対応に批判が集中したが、20年以上もたった現在にあってもまだなおこの問題は根本的な解決を遂げられぬまま、嫌な事件ばかり重なって起きているのが実際だ。おそらく、草森もこれらの事件を見聞いた際に、自らのいじめられた体験を重ね合わせていたはずである。結果、縷々体験に即した自説を述べるに至っていく。なお、草森の「いじめ」に対する見識については、今でも十分に通用する観点が多い。もちろん、「いじめられる側には、どこかに貧困さに無頓着な鈍なところがあり、嫉妬を受けるだけの何かがあるからだ」といったいわゆる〈いじめられる側にも問題がある〉という今ではなかなか受け入れられない議論もあるにはあるのだが、これは草森の実家の経済環境も考慮に入れて考えなければならぬまいし、また、「ハラスメント」といった受けた側の思いに焦点が絞られた思考のあり方が世間に受け入れられる以前の議論だった点も把握しておく必要があるだろう。いうまでもなく現代のいじめに関する考え方の根底にはいじめられた側の気持ちのポイントになっているのである。

しかし、草森の「いじめ」論で興味深いのは、実



は他にこんな述懐があることだ。

私の場合でいうと小学校の時は、泣きの手に出た。授業が始まっても泣いているのである。いじめっ子は困る。先生は、なぜかを問う。だが絶対、そのなぜかを言わない。いじめっ子たちがいつ言うかと困るだろうという意地悪さがある。告げ口より陰険である。〈中略〉手塚治虫は、どうしたのだろう。

と彼は憎々しげに語るのだ。ここには、それまでアトムを論じていた客観性などは微塵もない。自らの過去を回想し、腹を立てやり返した満足感のような心持ちを表白するのみ、である。そして、最後に手塚はどうだったのか、と語り出し、彼の中にある漫画への情熱が彼を「いじめ」の辛さから支えていたことに思いを馳せていることになるのである。漫画を描くことで現実から〈逃避〉し、かつ、それによって〈生きる力〉を得ていたとして、手塚に対する共感を表現しているわけである。さてそれでは、草森の場合は何からエネルギーを得て、辛い現実を回避していたのだろうか。残念ながら、その点についての彼の発言はこの文章からは伺えない。他にも、「いじめっ子もいじめられっ子も少数派であり、共に強い歪んだエネルギーの持ち主である。大半は、無風の傍観者である」との認識を示し、現代の議論にも通用する思考を披露している。この点については、いまさらいうまでもなくいじめ問題の大きな課題は〈傍観者〉の群であり、そこにこそ、「スクール・カースト」などと呼ばれている教室の歪な構造を解く鍵があるとの考えが現代では一般的だろう。その意味でも草森の議論は極めて先進的であるといってよいと考える。

さて、これ以降も、草森は一コマ一コマを丁寧に解説し、分析を進めていく。そこに、自分の思いを注ぎ込みながら論議を進めていくわけである。

ところで、本評論を読み進めていくと、草森の思考の枠組みにさらに別の特徴が浮かび上がる。例えば、こんな場面から。

戦後、母物映画が大当たりした。とくに大陸

では、敗戦によって、母と子が離れ離れになるという状況がおり、生みの親、育ての親の間で引き裂かれる子供の苦しみ、困難に際しても、くじけないけなげさを描き、ファンの紅涙をしばらせるという仕掛けの映画が大ヒットした。

今、あらためて考えてみれば、それは、「母物映画」というべきでなかった。児童向けの映画ではないが、「子供物映画」だった。子供のスターには、いろいろいたが、満州帰りの目の玉の大きい松島トモ子が、断トツのヒロインであった。

『鉄腕アトム』の第一作である『アトム大使の巻』の主題は、もちろん『母物』でないが、相当にひねくれた『父物』であるともいえるだろう。〈中略〉その顔（目というべきか）は、どこか松島トモ子の面影がある。

例えば黒澤明の映画「羅生門」や溝口健二の映画「雨月物語」のように、芥川龍之介や上田秋成の原作から大きく離れて、戦後、新たなる日本の夜明けを子供を使ってイメージさせた映画は少なくない。いうまでもなく敗戦下の日本の未来を子供たちに見ていたわけである。（この映画はともに海外で高い評価を受けた。両作ともベネチア国際映画祭で賞を受けた<sup>5)</sup> ことはいうまでもない）。その意味で、アトムにそんな色にがにじんでいても少しもおかしくはない。しかし、その点に草森の発見があると言っていいのではない。アトムを見たとき、直感的に子役・松島トモ子を想起したところにポイントがあるのだ。確かに、インターネット上にある子供の頃の彼女の顔立ちを眺めてみるとアトムと瓜二つ、なのである。こんな風に必ずしも分析的ではないところにも彼の思考は己の感性をひきづりこみながら、大きく旋回していくのだ。同じような例はまだある。

死んだ息子の飛雄<sup>トビオ</sup>（この名は、当時水泳で世界新記録を連発した古橋広之進と関係があるだろう。彼は、『飛魚<sup>トビウオ</sup>』と言われた）が心やさしい性格に思えたとしても、それはあくまで思いこみで、成長すれば、どうなったかわからない。

「トビオ」という名前と「富士山のトビウオ」と異名を馳せた古橋広之進を重ね合わすところなどに、彼の鋭く、それでいてどこかしらユーモラスな直感性があり、また、同時に表現力の生命線があると感じられる。彼はこの点からも自らを研究者とは呼ばずに、批評家・評論家、そして彼自身が自称した「物書き」という肩書きを愛した理由がわかる。

最後に、草森紳一が読者の思いに目を向けていた点にも触れておきたいと思う。アトムが機関銃で撃たれ動かなくなってしまう場面の解説。

これを見て、少年の読者たちは、またも仰天する。死んだ、というより、故障であるのだが、アトムに思いいれしながら読んでいた少年たちにとっては、死であり、これから物語はどうなるのだろうと心配になってくる。博士は、「かわいそうだが、しかたがない……」と弱々しく呟く。私は、アトム嫌いであったから、おそらく当時、凶暴なエゴイストである地球の天馬博士に同情しただろうと思われる。

自分の感覚に基づいて書かれた文章の中に、こんな形で客観性を取り混ぜようとしているのだ。読者（特に子ども）の側に立って立論し、と同時に、自らの感性にもじませていく。

草森紳一の書き方とはまさに対象に対し、徹底的に自分自身を放り込み、そこから〈草森紳一の物語〉を作りあげ、そして再び対象に戻ってくる。その時にある程度の客観性を担保できるように仕向けておく。そんな作業をひたすら繰り返す。まさにそれが草森の「書く」という行為の内実だったのである。

### 三

二では、草森紳一の批評の作り方について手塚治虫に関する評論を材料としながら概観してみた。評論家としての彼の思考法はまさに小林秀雄のそれと重なり合うところが多いと思うが、それについては今回は触れない。とりあえず、課題としてあげておくに止めたい。

さて、草森紳一といえ、やはり先に触れた『本

が崩れる』（文春新書 2005.10）を代表作にあげる読者が多いだろうと考える。ここでは彼の名文であるこのエッセーを通じて、その文章の書き方を具体的に検証してみたいと思う。

帯広大谷短期大学にはご遺族のご厚意で草森紳一氏の生原稿を幾種類かお貸しいただいている。そのなかには今とりあげた『本が崩れる』についてもその生原稿、そしてゲラが貸与されており、それらを見比べてゆけば、草森紳一の文章が完成されていくプロセスをつぶさにみていくことができる。また、完成し発刊された新書版にさえも、草森の赤ペンが入っており、これは彼が改訂版を出すに至った場合のために推敲に推敲を重ねていた跡とも考えることができ、このあたりからも文章に対する鬼気迫る彼の執念を感じ取ることができよう。草森紳一にとって、文章を書くとは、永遠に思考し続ける行為に他ならない。

ここでは『本が崩れる』冒頭の部分について分析を試みる。後ろに掲載している生原稿（図1～図9）を一見してすぐに気がつくのは、生原稿自体にどんどん語句を加えていっていることである。いうまでもなく、一般的に文章の推敲とは文字自体の正誤確認から始まり、読者が読むに際していかにわかりやすくできるのか、そのための論理的整合性を図ること、そして、その目的のためには不要な部分、あるいは重なりあっている意味合いなどを削り取っていくこと、つまりスリムにしていくことに、その作業の核心がある。しかし、結論を先に述べれば、草森はその逆を行っているのだ。生原稿を見ればすぐにわかるように、どんどん文章（言葉）が彼の頭脳から湧き上がり、文字として付加されていく。草森の「書く」行為とはそんな作業だったといえそうである。

またゲラに関しても、編集担当者が辟易するだろうまでに手を加えている様子が見て取れる。特に図10～図13ではそれがよくわかる。もちろん、手書きなので編集段階で担当者が読みきれず、間違ったままで活字化された部分の直しを入れているところが多いのだろうが、新たに書き直しているところもかなり伺えるのである。（なお、本稿においては生原稿の骨格部分と完成原稿の違いを中心にみていくこととしたい。完成原稿とは生原稿骨格部分に付加さ

れた全体像を指す。ちなみに、新書版の文章とは、さらに異なっている部分が多いこともとりあえず指摘しておきたい。

まずは冒頭文から。完成原稿では「数年前、風呂場の中に閉じ込められたことがある。」となっている。しかし、生原稿では「風呂場に閉じ込められたことがある。」と書かれた後に「数年前、」と「の中」が推敲で付け加えられている。かくして、冒頭文が完成しているわけだ。

続けて次の文を見る。(傍線部分が挿入記号などを使い生原稿に付け加えられている箇所である。以下、引用では同じ表記とする。)

生原稿の骨格部分では次のように書かれている。

ひさしぶりに痒くなった髪でも洗おうかと、廊下のそばにあるドアをあけて、浴室に入ろうと入れた途端突風のようなものに押されて、脱衣場の中におしこまれた。

この部分に、次のように種々言葉が付け加えられていくことになる。

一仕事を終り、ひさしぶりに痒くなった白髪頭でも洗ってやろうかと、廊下のそばにあるドアをなかばあげ、いざ風呂場へと、いつもの調子で窮屈そうに半身を入れた途端、なにか鋭い突風のようなものに背をどやされて、クルッと脱衣室の中へ捲きこまれるように押しこまれてしまった。

生原稿を確認すればわかるように、どんどん語句が増殖しているのである。「一仕事を終り、」を加え、髪に「白」と「頭」を足してゆく。もちろん、「髪」が痒いのではなく、「頭」が痒いのであり、髪の毛の色も「白」と書き加えている。こんなところにも草森のリアリティのある言葉へのこだわりを見ることができようか。「洗おうか」も「洗ってやろうか」と変更し、「頭」を客体化している。ドアを開ける場面においても「なかば」と加えている。さらに、「いつもの調子で窮屈そうに」と一節を付け加え、「押されて」とあったのを「背をどやされて」

に変更している。(ちなみに草森はこの「どやされて」という表現がお気に入りだったのではないか。この一文の中で言葉が完全に置き換えられているのはこの箇所だけだからである)。さらに押しこまれた様子を「クルッと」と説明することを忘れない。このように見てみると、明確に気づくことがある。先も述べたように完成原稿になっていくために、生原稿からもわかるように、どんどん表現が増殖していくということだ。しかも、(写真ではなかなか判別しにくいかも知れぬが)黒い文字色の濃淡から1回で作業を完了させているのではなく、時間をおいて数度にわたり書き込みを行っているだろうことが想定できることだ。ちなみに文字の濃淡からこの後の文章の色が濃くなっており、一文一文に対して推敲を行っていただろうことも、同時にわかってくる。生原稿の2頁(図2)段落代わりから、墨の色が濃くなってきているのだ。これはこの部分と相前後して推敲していることが想定できると考える。つまり、冒頭一段落は2段目を書く前後に同時に徹底的に手を入れていることになるわけだ。これは実際相当に大変な作業だろう。通常、文章を書いていく場合、ある程度全体像が明確になってから推敲を行うのが普通だと思う。しかし、草森紳一という書き手は一文一文をある程度完成原稿に仕立てあげるまで、しつこいくらいに手を入れ続けている、そう分析できるのである。つまり、執拗に細部にこだわっていくのだ。(生原稿の挿入記号の状態からも、一文が終わり切らぬうちに多くの語句を付け加えていることもよくわかり、その点からも彼の推敲の内実がビビッドに浮かび上がってくる。)なお、ゲラとの関係でいえば「浴室」を「風呂場」に変更している(図10)。冒頭の一文に「風呂場」を使っているのでおそらく重複を避けるべく「浴室」としたのであるが、結局、「浴室」では近代的に過ぎて、文春新書版で「風呂場」に戻したのではなかろうか。こんなところからも、草森の言葉の選択に対する執拗なまでの〈こだわり〉がよくわかる。

つづけて、次を見てみよう。

ドドッと本の崩れる音がする。首をすくめると、またドドッと崩れる音。

ここに関しては、訂正はない。そして次。  
生原稿骨格部分では次のようになっている。

連鎖反応して、本が四散するのである。あいつら、俺を笑っているな、と思う。こいつは、また元へ戻すのに骨だぞ、と顔をしかめる。

先程と同じように言葉をどんどんつけ加えていく。

一個所が崩れると、あちこち連鎖反応してぶつかり合い、積んである本が四散するのである。と、またドドっ。耳を防ぎたくなる。あいつら、俺をあざ笑っているな、と思う。こいつは、また元へ戻すのに骨だぞ、と顔をしかめる。

前文と同じように、骨格だけの文章にこれから彩りを与えていく作業が見て取れるわけだ。「一個所が崩れると、あちこち」を加え、「連鎖反応して」のあとに「ぶつかりあい」を入れる。さらに「本」の前に「積んである」を足していく。「笑う」の前に「あざ」を付加し、「と、またドドっ。耳を防ぎたくなる。」を挿入してくる。

生原稿3、4ページ(図3～4)は結局〈ボツ〉になったようで、新書版の文章は続けて5ページ目からになっている。

生原稿骨格部分では次の通り。

浴室へ入るドアは、半開きにしかならぬ。半分ほど本が立ちはだかっていて、開かないのである。窮屈そうに入るのはそのためであるが、慣れると、人の目には、窮屈そうでも、案外とスムーズに身を半開きの穴へくぐらせることができる。

同じく、傍線部分が〈増殖〉している。

そもそも浴室へ入るドアは、いくら強くひっぱっても、半開きにしかならぬ。その前に半分ほど横積みの本が立ちはだかっていて、開かない。身をよじって窮屈そうに入るのは、そのためである。が、慣れると、人の目には、窮屈そ

うでも、口笛吹くほどでないが、案外とスムーズに、身を半開きの穴へくぐらせることができる。

「そもそも」、「いくら強くひっぱっても」を加えている。本の状態を具体的に説明し、さらにドアへの入り方をより具体的に説明をしていく。自分が風呂場において体験してしまったことを忠実に文章に再現していこうとする努力がこの辺りの手書き原稿からもよくわかる。たとえば、新書版ではこのあたり次のようになっている。

〈前略〉ところが、慣れると、よくしたもので、人の目には窮屈そうに見えても口笛吹くほどではないが、案外とスムーズに、半開きの穴の中へ、わが身をくぐらせることができる。

生原稿に種々書き込んだ後も最終稿に至るまでこんな形でひたすらに書き込み、修正を続けていた草森の鬼気迫る姿が目には浮かぶようである。

もう少し眺めてみよう。

おそらく、体のキレが悪く、それが油断になって、ドアの隙間からからだを滑りこまざる時、本の端にぶつけてしまったのだと、薄笑いした。油断である。ともかくその散乱状態を調べるため、いったん外へ出ようと、ドアを押した。

なんと開かないではないか。ノブを逆にまわす癖があって、その逆をやってみたが、ドアは、びくともしない。

むかし、学生時代のころか、講演会があり、だれがしゃべったのか、忘れたが、吉田健一だけは覚えている。話のほうは、まるっきり覚えていないが、うしろ姿だけが、よく記憶に残っている。

というのは、講演の終わった吉田健一が壇場を下りて退場しようとした時におこった、ちょっとしたトラブルなのである。

この部分も大幅に推敲が重ねられていることがよくわかる。ここでも文春新書版から、以下引用して



みる。

おそらく、この日疲れのためか体のキレが悪く、それが油断になって、ドアの隙間へからだと滑りこませようとした時、うっかり本の端にぶつけてしまったのだ。大油断である。ともかく、その散乱状態を調べるため、いったん廊下へ出ようと、ドアのノブを回し、外へ押した。

これはこれは、なんと開かないではないか。ノブを逆にまわす癖があるのを思い出し、その逆をやってみたが、ドアは、びくともしない。なんたることだ。

むかし、といっても学生時代のころで、ずいぶん昔の話になるが、東京の三田にある大学の演説館で、講演会があった（学園祭なのか、百年祭の時なのか。後者なら1年生の時だ）。だれがしゃべったのか（3人ほど講師に招待されていたと思うが）、忘れてしまったが、まちがいなくそのうちの一人が英文学者の吉田健一だったことだけは、よく覚えている。話の内容のほうは、まるっきり消えているが、彼のうしろ姿のみが、妙に記憶に残っている。

というのは、（おそろしく訥弁の）講演をようやく終えた吉田健一が壇上小机の前を去って、いざ退場しようとした時におこった、ちょっとしたトラブルの話なのである。

ここをみても事情は大体同じであろう。繰り返になるが、骨格が出来てそれに肉付けをしていく、そんな草森紳一という書き手のありようが見て取れるのではないだろうか。ここまで、わずかに新書で2ページ、字数にして1100字前後しかないのだ。

ちなみに吉田健一のエピソードは、彼が風呂場に閉じ込められた刹那の印象から思い出した光景であった。ノブを回しても開かない吉田の滑稽でもある姿を彼はまさにこの文章を書いている時に（あるいは自らが実際に閉じ込められてしまった時に必死でノブを回した際かもしれないが）思い出した。学生時代、何十年も前だ。ここにも、先の手塚治虫に関する評論の分析の中でも触れたように、自らの体験や記憶を自己の感性で捉え直し、文章化していくといったスタイルこそ草森のエクリチュールであっ

たということがよくわかる。

こんな精魂尽きはてんばかりの仕事を草森紳一は3万2千冊に至らんとする崩れんばかりの本の山の中で、原稿用紙に向かって格闘していたのである。執念といえよいか、執着といえよいか。増殖を続ける文字たちは、苦しむ草森の身体をあざ笑うかのように、彼の命が尽きるまで生み出てきたのである。結果、今日に到るまで彼は60冊を超える著作<sup>6)</sup>を世に送り出した。これを〈執念〉と呼ばずして何と言うべきか。

## 結

草森紳一氏の生涯を賭けた蔵書が故郷・音更町に到着した日、季節外れの大雪が降った。初雪だった。2009年11月11日のことだ。東京から蔵書が入ったダンボール約700箱を積んできたトラックはまだ夏タイヤのまま。路面の悪さと悪戦苦闘しつつ、なんとか一番最初の保管地であるオサルシ公民館（元長流枝小学校）に運び込まれた<sup>7)</sup>。それから、7年余りが経った。地域ボランティアの人たちの努力によって少しずつではあるが、蔵書の全貌が明らかになりつつある。先述したように、それに歩調を合わせるが如く草森研究も動き始めてきたのが、ここ数年の流れである。しかし、西牟田氏も述べられたように、草森自身はひたすらに積み重ねたあの本の山の中でこそあれだけの仕事ができただけであり、こんな風に整理整頓されてしまった自らの書物をどう思っているのか、もしかすると、本意ではないのかも、などと感じてしまう時も正直言っているのだ。もちろん、3万2千冊に及ぶ蔵書を整理し、彼の仕事の全体像をその関わりの中で検討していくことは、草森評価にとっては、まずもって行わなければならない重要な作業であり、それが間違っているというのではない。このとりくみによって、草森紳一という評論家の文学史的な意義が明確になり、日本の20世紀末の文化をめぐる表現形態の言説を把握する基盤となることができる、と考えるからである。しかし、と思ってしまうのだ。彼の憑かれたような仕事ぶりを本当に理解するためにはあのような状況をどう理解するのか、そこでいったい彼は何を考えていたのか、どれだけ後世の人間がそれを体感でき

るのかといった点が、おそらくポイントになるのでは、と思っているのだ。

草森は「本の行方」(NOMA-PS 485号 1992年)の中で、蔵書の行く末を案じていた。それは確かである。ただ、彼は結局生きている間に〈けり〉をつけることはできなかったのだ。それは、もしかするとできなかったのではなく、しなかったのではないか、とも思ってしまうのである。まさに、2DKの中に3万冊強がひしめき合っているような状況のうちにあるからこそ、鬼と成れた己の「物書き」の理想的な姿をそこにしっかりと見据えていたと思ってしまうのである。

本稿では大きく二点に渡り、論を進めてきた。一つは批評のスタイルという点。これについては彼の手塚治虫に関する論を具体例としながら、論じてきたのだが、つまりは彼の全人生をかけて己と向き合いながら文章を紡いでいたということの確認ができたと考えている。また、文章の書き方自体としてはひたすらに終わりのない推敲を繰り返し、決して手にすることのできない〈完成原稿〉を求めて、あの閉じられた2DKという空間の中で格闘していたひとりの男の姿を見ることができたように思っている。

この稿では、実は草森紳一という「物書き」を考える際の課題ばかりが見えてきたに過ぎない。その意味で草森紳一という〈博覧強記〉と称された文学者の大きさの一端だけでも披瀝できたとすれば、それで十分意義はあるのだ、と勝手に考えている。

(本稿は、2015年9月5日に音更町図書館で話した「草森紳一～文章作法を巡って～」草森紳一蔵書整理プロジェクト記念講座の内容を元としている)。

## 註

- 1) ブログ「崩れた本の山の中から 草森紳一蔵書整理プロジェクト」2008.12.07付の記事の中で円満字二郎氏は「蔵書の中に分け入ることは、その持ち主の脳内を探検することだ」と語っている。なお、2009.05.01に作られたチラシの中でも「その蔵書の中に分け入ることは、「博覧強記」と称

されたその脳内を探検することでもある。」と記されている。ちなみに行き場を失った草森紳一氏の蔵書をどうにかするために有志の皆さんがこのチラシを作り配ったと聞く。草森紳一氏が亡くなられてわずか一年余のことである。皆さんの熱意には頭がさがるのみである。

- 2) 帯広大谷短期大学が草森紳一氏の蔵書を受け入れるまでの経緯については註1)のブログ並びに、拙稿「草森紳一蔵書の〈奇跡〉—蔵書を受け入れるまで、あるいはこれからの展望と課題—」(帯広大谷短期大学生涯学習センター紀要第1号 2012・5)を参照いただけると幸いである。

- 3) 2016年11月現在、漫画関係の蔵書2513冊が公開されている。

なお、備考欄に付箋の貼られている頁数の記載などがある。

- 4) 「太陽」(1981・11)に草森紳一は「塔の中の迷宮、もしくは母なる内蔵空間」と題する文章を寄せている。その中から一部引用しておこう。

設計(山下和正氏)に際しての注文は、できるだけ本が狭いスペースに収容できること、書齋に籠ることが、胎内に回帰するような「内蔵空間」を表現すること、この塔の側を通る子供たちが見て、大人になっても奇妙な塔の記憶が残るようなフォルムを造ることだった。

“母胎回帰”の中でこそ創造し得る〈何か〉を彼は明瞭に意識していたということか。

- 5) 黒澤明の「羅生門」は1950年大映京都で作られた。ベネチア国際映画祭でグランプリ(金獅子賞)を受賞している。また、溝口健二「雨月物語」は1953年、同じく大映京都で製作され、同映画祭で銀獅子賞を獲得している。いずれの映画も戦後すっかり元気のなくなってしまった日本を元気付けるには十分の快挙だった。

なお、黒澤明の「羅生門」の物語の基調は芥川龍之介「藪の中」であることを付け加えておく。

- 6) 草森紳一の生前に発刊されたのは計48冊。没後を含めると『夢の展翅』(青土社 2008・7)以来、再版された『絶対の宣伝』全3巻(文遊社 2016・5完結)に到るまで、合わせて62冊に上る。もちろん、草森紳一氏が逝去された後にご遺族が

中心となって、刊行しているわけだ。いずれにせよ、膨大な書物を世に出していることになる。  
7) 前掲註2)を参照いただきたい。

## 謝辞

本原稿の掲載に際し、香川短期大学の石川浩学長、香川短期大学紀要編集委員会委員長の竹安宏匡教授を始め、多くの教職員の皆様にお骨折りをいただいた。

香川短期大学と帯広大谷短期大学は2015年6月5日に大学間の教育研究に関する連携協定を結び、学生交流や教職員交流を重ねてきている。今回、香川短期大学創立50周年を記念して、本学教員からの寄稿を依頼された次第である。この度の要請は二大学の教育研究連携の礎になるのではとの期待もあり、また、私個人にとっても拙論を掲載していただき、草森紳一氏という「物書き」を知ってもらいたい機会ともなった。

この場を借りて石川学長先生はじめ香川短期大学の皆様の御厚意に心より御礼を申し上げる次第である。

(一) 緯綫 (C)

1  
✕

名を揚げて聞じにからせしと  
 知らる。しが終に達  
 言がと、おたのそはにふるにア

2

音が、  
 突風のトウなる  
 々（鉄）ものにて、脱衣場の中  
 ドドクと本の照れる音がする。  
 着てしまふと、またどどどと響く音。  
 重。毛織長を引いて敷きつめるので  
 一個が、おれらとあちこちある。あち  
 つら、佐々木さんには石ころ、とどろく。  
 つい、またこれに居すのには、さうぞう、と







可成屋

∞  
✕

可成厚





FDあ

22

文壇

H.11.10月号

草森紳一

# 本が崩れる

14p

天地エッセイ

数年前、風呂場の中に閉じこめられたことがある。  
一仕事を終り、ひさしよりに痒くなった白髪頭でも洗ってやろう  
かと、廊下のそばにあるドアをなげ、いざ風呂へといつも  
調子で着替えに半身を入れた瞬間、なにか鋭い突風のようなもの  
に背をどやされて、クルッと脱衣室の中へ捲きこまれるように押し  
こまれてしまった。  
ドドッ、と本の崩れる音がする。首をすくめると、またドドッ、と崩  
れる音。一個所が崩れると、あちこち連鎖反応してぶつかり合い、  
横たわっている本が四散する。と、またドドッ。耳を動かさなくとも、あ  
いづら、俺をあざ笑っているな、と思う。こいつは、また元（戻す  
のに骨だぞ、と顔をしかめる。  
く、と口をきく。く、と口をきく。く、と口をきく。  
そもそも浴室へ入るドアは、いくら強くひっぱっても半開きにし

風呂場

17

図10





